「子どもはみんな問題児」を読んで　　　　　　　　　　　　　　　斎藤智子

　この本は、子育てに悩んでいるお母さんに向けて書いた本でしたが、著者が保育士さんである事、幼稚園での母という意味でのたくさんの子供達と向かい合う為に、とても参考になりました。

　子どもへの最高のほめ言葉は「子どもらしい子」。子どもらしい子とは、個性がはっきりしていて自分丸出し、堂々と毎日を生きている。皆が自分を出せるような保育をし、幼稚園は子ども達が「行きたいから行くところ」「全員が休まず喜んでくるところ」となるようにしなければいけない。それを実現させるにはまず、子ども達は保育者をよく見ているということを踏まえ、子どもから好かれないと良い保育はできない。親とも信頼関係が築けないといけない。保育者とは、子どもの遊びが良い方向に行くように見守り、そのためにヒントを与え励まし手を貸すが、遊び自体は子どもの世界、無神経に踏み込まず、目を離さずに見守っていくのが大事。そして、どうしたら楽しく遊べるのか？つまらなかったら子どもは来なくなる。楽しい保育に絵本はかかせない。優れた本とは「読んで子どもが成長する本、何度も繰り返し読まれ、読むたび新しい発見があり、真実と創造のある本」。簡単に言うと「もう一度読んで」が良い本。子どもが途中で飽きたら飽きない本を与える。子どもが悪いわけではなく本の選択が悪い。人はことばによって人になる。ことばを定着させるものとして本がある。と改めて絵本の大切さを感じました。

又、保育のポイントとしては

・けんかが起きた時、基本最初から見ていなければいけないが、皆が落ちつくところまで言い分を聞き、両成敗とする。きちんと話を聞く。

・子ども達に「待って」「後で」は通用しない。何かを訴えていたり話を聞いて欲しかったり、気持ちを察し、少しでも軽くするのに「はあい」「なあに」、生返事でもいいから、まずは受け止める。それから話を聞いていく。

・子どもは空想と現実の世界を行き来する。保育者も一緒に行き来できたら良い。

・ケガや命に関わる危険はきちんと教える。やってはいけない事はきちんと話す。等、共感しました。

この本の中には改めて大事と思う事や「そうそう」と共感する事がたくさんあってまとめにくかったのですが、保育者、母親として教えられ、安心させてくれた一冊となりました。著者の言っていたように、子ども達のたくさんの笑顔からエネルギーを貰って頑張ろうと思います。